




子育て支援者の コンピテンシーリスト

Ver.2 直接支援者向け



子育て支援者コンピテンシー研究会

子育て支援者の コンピテンシーリスト

Ver.2 直接支援者向け

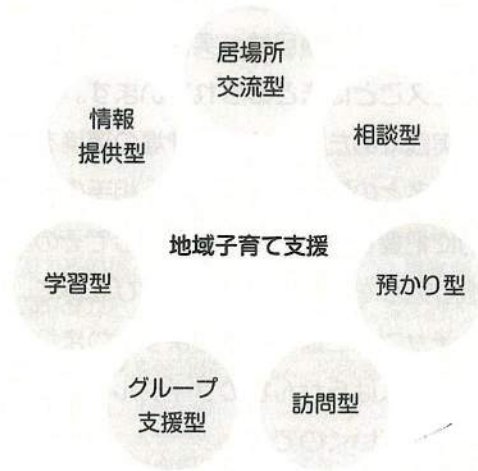
【コンピテンシー (competency): 力量。ある目的を的確・適切に達成するときに必要な能力や技量】

I コンピテンシーリスト Ver. 2とは

このリストは、地域子育て支援センター、つどいの広場などの乳幼児と、その保護者を中心とした居場所交流型支援において直接親子と接する支援者を対象としています。(右図)

リストの項目は、支援の実践の場における具体的な行動を整理し、コンピテンシー要素として抽出したものです。

一つひとつの行動は全体的な支援の中の基本的要素となるもので、これらの要素が連関して、柔軟かつ総合的に実践されて初めてその効果が最大限に発揮されます。



2 リストを使用される前に

自己研鑽と研修

このリストは、他者との能力比較をするものでも、他者を評価するものでもありません。
リストは、支援者の自己研鑽と研修の資料とし、子育て支援の質を高めるためのものです。

強み・弱みを知る

コンピテンシーリストは、支援者がこれら全てを兼ね備えていなくてはならない、ということを示しているものではありません。実践現場では、完璧な支援者が一人だけいるよりも、多様な支援者の組み合わせによってコミュニティが形成されている方が、現実的であり、大切だと考えられます。

適性のガイド

コンピテンシーは、適性のガイドとなります。たとえば、寛容であることは直接親子に携わる子育て支援者には適切ですが、経理の担当者には不適切です。職務によって適切なコンピテンシーは異なりますので、自らの適性について考えてみましょう。

3 コンピテンシーリストの全体像

3-1 実践における5つのプロセス

このリストの項目は、実践における5つのプロセスごとにまとめられています。

実践にあたっては、まず場の環境を設定し、利用者との関係を構築して、相手の状況を適切に把握し、支援します。そしてその実践の振り返りを通して、新たな学びを得て、次のステップへと進んでいきます。つまり、このプロセスはらせん状のサイクルを描くように発展していくのです。



3-2 支援者のコンピテンシー要素

5つのプロセスは、それぞれいくつかのコンピテンシー要素から構成されています。

〈環境を設定する〉

- ・居心地のよい場をつくる
- ・安心感のある場をつくる
- ・寛容な雰囲気のある場をつくる
- ・人と人の関係が生まれる場をつくる
- ・利用者の主体性を尊重した場をつくる
- ・子どもの支援ができる場をつくる
- ・親の支援ができる場をつくる
- ・利用者が参画できる場をつくる
- ・地域の特性に合わせた場をつくる
- ・病気や事故予防に配慮した場をつくる
- ・場の全体に気を配る
- ・守秘義務を守る

〈関係をつくる〉

- ・あたたかく迎える
- ・親しみやすい雰囲気を持つ
- ・公平に接する
- ・対応を相手に合わせる
- ・対等な関係をもつ
- ・人としての存在を尊重する
- ・中庸を大切にする
- ・多様性を受け入れる

〈相手を知る〉

- ・課題がある親子を発見する
- ・相手の問題のとらえ方を把握する
- ・個別の問題を関係性的問題としてとらえる
- ・個別の問題を生活の問題としてとらえる
- ・個別の問題を社会的な背景と関連づけてとらえる
- ・現状に合わせた支援の見通しをもつ
- ・自分が対応できる親子かどうかの判断をする

〈支援する〉

- ・気軽な相談を大切に受けとめる
- ・相手の話を、肯定的関心を持って傾聴する
- ・他人の気持ちを想像し、共感的な対応をする
- ・タイミングを見はからう
- ・相手が自分の力に気づく働きかけをする
- ・肯定的な言い方をする
- ・わかりやすく伝える
- ・相手の視野を広げる
- ・課題を解決する方法を具体的に示す
- ・相手の自己決定を尊重する
- ・親と子の関係を支援する
- ・子どもへの教育的な支援をする
- ・子どもへの養護的な支援をする
- ・特別なニーズを持つ子どもを支援する
- ・仲間づくりをうながす
- ・チームワークを尊重する
- ・必要な資源につなげる
- ・ねばり強く支援し続ける

〈振り返る・学ぶ〉

- ・活動の分析を行う
- ・実践のために学ぶ

3-3 4つのレベル

それぞれのコンピテンシーは、4つのレベルに分けて行動を表示しています。

それぞれの項目について理解するためには、4つのレベルをすべて読み、自分にチェックがついたレベルよりも、上のレベルの行動を参考にして、学びと実践を深めることが必要となります。

I 居心地のよい場をつくる

- S 子どもも大人も安心してくつろげるような配慮を行う。清潔で季節感と心遣いのある場を保つ。感覚刺激（音、光、色、においなど）の量に配慮して、トータルであたたかく居心地のよい空間を保つ。
- A 環境が居心地の良さに影響を与えることを知っている。率先して掃除や整理整頓をし、利用者が気持ちよく過ごすことができる場を用意する。
- C 楽しく明るい場のセッティングを心がける。過度な装飾や音響効果などを用意してしまう。
- D 利用者にとって不快な刺激（大声、香水など）を発している。汚れに気づいても掃除をしない。

S ……この項目を自然に行動し他者に説明できる

この項目に関する知識と技術を十分に身につけており、必要な対応が自然にできます。さらにこの項目の意味について他者にわかりやすく説明することができます。

A ……この項目を理解し行動している

この項目に関して自分の判断で相手に届く支援ができています。また初心者のモデルになります。

C ……この項目に関して学習が必要である

この項目にチェックがつく場合、上位項目を繰り返し読み、自分の行動を振り返りながら、経験と学習をつみ重ねることが求められます。

D ……この項目に関して不適切な行動を行っている

この項目にチェックがつく場合には、支援の場にいることで来場者の不安を増やし、来場者を遠ざける可能性があります。したがって早急に行動の変化が求められます。指摘されても行動を変えることができない場合には、親子に直接接するボランティアやスタッフの参加について再考しましょう。

4 補足

4-1 「利用者」 ……このリスト内で「利用者」と表示している場合は、子どもと大人の両方を指しています。

4-2 「親」 ……親、祖父母、養育者などを指します。

4-3 「該当なし」 ……その項目にはS、Dに該当する行動はありません。

5 コンピテンシーリスト

〈環境を設定する〉

I 居心地のよい場をつくる

- S 子どもも大人も安心してくつろげるような配慮を行う。清潔で季節感と心遣いのある場を保つ。感覚刺激（音、光、色、においなど）の量に配慮して、トータルであたたかく居心地のよい空間を保つ。
 - A 環境が居心地の良さに影響を与えることを知っている。率先して掃除や整理整頓をし、利用者が気持ちよく過ごすことができる場を用意する。
 - C 楽しく明るい場のセッティングを心がける。過度な装飾や音響効果などを用意してしまう。
 - D 利用者にとって不快な刺激（大声、香水など）を発している。汚れに気づいても掃除をしない。
-

2 安心感のある場をつくる

- S 柔らかくあたたかい表情をして、周囲に優しい雰囲気醸し出している。自分が場に与える影響について自覚しており、意識的に心配りしているか、あるいは自然にそうになっている。どんな状況でも安心感を与えるふるまいを行なう。
 - A 歩く場所や速さ、声の大きさなど自分の立ち居ふるまいが周囲にどう受け取られているかを知っている。いつも身ざれいにしていて、人に笑顔を向けている。
 - C 声が大きいの、動きが雑、場の中を走る、人の前を横切る、利用者に背中を向けておもちゃを片付けるなど、時々人に配慮が欠けるときがある。
 - D 不機嫌な表情をしていたり、無表情だったりする。言葉遣いが乱暴である。
-

3 寛容な雰囲気のある場をつくる

- S トラブルをチャンスととらえることができる。おたがいさまという雰囲気を、場の文化としてつくることができる。
 - A 人はおたがいさまであり、補い合って助け合って一人前であるということを親に伝えている。
 - C トラブルが起きないようにする。
 - D 利用者を監視している。施設の管理や規則を最優先する。
-

4 人と人の関係が生まれる場をつくる

- S 場のなかで、自然に人と人との関係が生まれるように環境設定を行なう。おもちゃの選定や空間設定などを通して親子の関係を育む環境をつくる。親と子どもの距離感に合わせた場をつくる。
- A 人と人の関係が生まれる場や時間をつくっている。
- C 人と人との関係が生まれる場が大切であることを知っている。
- D 該当なし

5 利用者の主体性を尊重した場をつくる

- S 利用者が常に自分で行動を選択し、決定できる場をつくっている。
- A 利用者の主体性を尊重することが大切であると知っている。利用者の判断を待つ。利用者が主体性を発揮できる場を設定する。
- C 利用者をお客様として遇する。
- D 該当なし

6 子どもの支援ができる場をつくる

- S 来場する子どもの年齢、個性、発達の状況に合わせて遊びの素材と道具を選択し、子どもが遊びやすいように配置する。
- A 子どもが自発的に遊びを始められる場をつくる。年齢に合わせたおもちゃを準備する。
- C 場におもちゃを用意する。
- D 子どもにとっての居心地を考えない。子どもは何もしなくても育つと思っている。

7 親の支援ができる場をつくる

- S 子育てに無力さを感じている親が、生きた経験を通して効力感を感じる場をつくる。親が気づき、驚き、感動を得られる場をつくる。
- A 生きた多様な体験と観察の中で、親が自然に学べるような場をつくる。
- C 子育ての学びの機会を与える。
- D 子育ては本能でできているので、学びの場を設定しない。

8 利用者が参画できる場をつくる

- S 安心、安全な環境の中で利用者が自分の特技や専門性、自分らしさを生かして場に参画できるようにしていく。
- A 利用者が場を構成する一員として参画する機会をつくる。また利用者と共に場のあり方を評価し検討する。
- C 援助の受け手が同時に与え手ともなることを知っている。
- D 支援者が主役になっている。利用者に強制的に参画を求める。

9 地域の特性に合わせた場をつくる

- S 地域の特性や家庭の現状を把握し、場の設定と活動内容に反映させている。
- A 地域の特性や家庭の現状と、支援の現状を行政・民間合わせて把握している。
- C 自分が行ないたい支援を行っている。
- D 該当なし

IO 病気や事故予防に配慮した場をつくる

- S 事故防止、感染症の予防について、適切な対応を人に教えることができる。場を見て、事故の可能性を予測できる。責任を負う覚悟がある。地震・台風・火事など、利用者の生命を守ることが必要な場合に、安全を最優先する決断を下し、行動する。
- A 場の安全管理を常に行っている。支援に必要な最小限の事故防止と感染症の予防を説明できる。
- C 環境が事故の可能性につながることを知っている。避難経路や非常用設備の場所、使い方を知っている。感染症・アレルギーに関する基礎的な知識を持っている。
- D 事故の可能性があっても放置する。感染症・アレルギーに関する知識を持たない。

II 場の全体に気を配る

- S 気配りや目配りが習慣化している。子どもと遊んでいるときや親と話しているときにも、全体に目を配っている。全体を見渡せない場の設定をそのままにしない。
- A 場の全体が見えるように身体の向きと位置に気をつけている。
- C 利用者に対する個別対応に終始する。
- D 利用者がある場にはいない。受付カウンターや事務室の中において、利用者と最低限しか、かかわらない。

I2 守秘義務を守る

- S 該当なし
- A 自分で守秘義務の遵守と、共有しなければいけない情報を判断する。
- C 所属機関の守秘義務に関する規定を知っており、守ることができる。
- D 個人情報了他言してしまう。個人データを放置する。

〈関係をつくる〉

I3 あたたかく迎える

- S 自分から自己紹介をする。フォローが必要な人には声をかける。相手への関心を態度や言葉で伝える。相手と自然に関係をつくる。
- A 相手に自分から明るく挨拶をする。はじめての人、一人である人に働きかける。
- C 相手に自分から挨拶をする。自分の好きな相手や話しかけやすい人に話しかける。
- D 相手に自分から挨拶をしない。無視をする。

I4 親しみやすい雰囲気を持つ

- S いつでも親しみやすい雰囲気を保つ。
- A 気軽に話しかけやすい。世間話ができる。
- C 自分の感情や雰囲気を意識的にコントロールする必要性を知っている。
- D 気分ムラや感情の起伏が激しく、人に気づかれる。

I5 公平に接する

- S 公平の意味を理解し、働きかけをより必要としている人には時間を使う。
- A 立場や年齢の違いがあっても自分の態度を変えない。表面上の特徴や相手の態度に左右されずに接する。
- C 自分が対応しやすい相手とばかり接する。
- D 相手を差別する。相手を比較する。

I6 対応を相手に合わせる

- S 相手に合わせて距離や位置を変える。
- A 相手の視線の高さに合わせて話しかける。声の大きさ、スピード、言葉遣いなどを相手に合わせている。
- C 高い位置から話しかける。遠くから話しかける。自分のペース、自分の言葉遣いで話をする。
- D 目の前、真後ろなど相手が不安を感じる位置に入り込む。一方的にしゃべり続ける。

I7 対等な関係をもつ

- S 援助していることを相手に感じさせない。人に弱さを見せられる。
- A 年齢が高いことやスタッフであることによる権威を相手に感じさせない。相手が気軽に話しかけられる。
- C 相手に一方的に支援したがる。自分がスタッフであることを誇示する。
- D 威圧的・指導的にかかわる。

I8 人としての存在を尊重する

- S 謙虚に誠実に他者の人生に触れることができる。支援へのおそれを感じる。
- A 主張できない子どもであっても、どんなに人として未熟であっても、人としての存在そのものを尊重する。
- C 子どもを親と別個の人格としてとらえている。
- D 母子を一体視し、子どもは親の付属物だと考えている。

19 中庸を大切にする

- S ほど良さや中庸に価値をおき、失敗、未熟さを肯定的に受けとめることができ、相手に安心感を与える。無理をしないし、相手にも無理をさせない。
- A ほど良さや中庸に価値をおき、失敗、未熟さをあたたかく見守る。
- C 失敗や未熟さを見守ることが大事だということを頭では理解しており相手を非難はしないが、イライラする。行動が伴わない。
- D 白黒をはっきりさせることを好む。完璧さを求め、未熟なものにイライラを表現する。失敗や試行錯誤をマイナスだと考え非難する。

20 多様性を受け入れる

- S 人にはさまざまな価値観があり、いろいろな生き方をすることを十分理解し、他者を受け入れることができ、その差異を興味深く受けとめられる。
- A 人にはさまざまな価値観があり、いろいろな生き方をすることを十分理解し、他者を受け入れることができる。
- C 人にはさまざまな価値観があり、いろいろな生き方をしていることに気がつかず、他者に対して違和感を持っている。
- D 居住地域、経済状況、家族形態、人種、宗教、学歴などによる偏見をもって利用者の判断材料にする。自分の価値観を絶対視し、自分の考えを押しつける。

〈相手を知る〉

21 課題がある親子を発見する

- S 利用者や他のスタッフが気づかないような課題を発見する。利用者が訴える問題について、特別な援助が必要な問題とそうでない問題を区別する。
- A 利用者の様子から問題に気づく。
- C 訴えられれば問題に気づくことができるが、利用者の様子からは問題に気がつかない。
- D 該当なし

22 相手の問題のとらえ方を把握する

- S 相手が何を問題と感じているか、相手がどのようにとらえているかを、対話や観察などを通じて想像し、相手に尋ねるなかで、明らかにしていく。対話のなかで相手の課題を整理する。
- A 相手が何を問題と感じているか、相手がどのようにとらえているかを質問する。
- C 自分の視点で問題をとらえる。
- D 該当なし

23 個別の問題を関係性の問題としてとらえる

- S 子どもと親それぞれの課題を別々にとらえるのではなく、関係性の中でとらえる。親と子がニーズの矛盾をつむぎ合わせながら成長していく関係性を理解している。
- A 子どもが親に影響を与え、親が子どもに影響をあたえるという双方向性を知っている。
- C 母親などの大人が子どもに影響を与えることを知っている。
- D 該当なし

24 個別の問題を生活の問題としてとらえる

- S 現代における育児の状況を把握している。多様な家族と生活を理解している。相手が抱えている課題を生活の課題としてとらえる。
- A 日常生活を大切に考えられる。
- C 「がんばりましょう」など、生活の問題解決につながらない心理的解決を求める。
- D 該当なし

25 個別の問題を社会的な背景と関連づけてとらえる

- S 子どもと親の課題を、親子をとりまく対人関係の他、生活環境、地域環境など多面的に広く視野に入れて考えることができる。
- A 子どもと親の問題を、親子をとりまく対人関係を視野に入れてとらえる。
- C 子どもの問題を親の心理問題や子どもの気質、性格、障がいとしか考えられない。親の問題を性格など個人的な問題ととらえる。生活を想像しない。
- D 該当なし

26 現状に合わせた支援の見通しをもつ

- S 長期的視野をもって段階的に具体的な支援の見通しが立てられる。
- A 相手に過度な要求をせず、親子の現状に合わせた支援の見通しをもつ。
- C 支援の見通しは立てられないが、その場での対応を行なう。
- D 該当なし

27 自分が対応できる親子かどうかの判断をする

- S 客観的に親子の課題をとらえることができ、それに対応可能かどうか判断する。
- A 支援には限界があることを知っている。
- C 感情移入がすぎて、自分の問題のように感じてしまう。適切な距離感を持ってない。
- D 該当なし

〈支援する〉

28 気軽な相談を大切に受けとめる

- S よく観察し、視線や雰囲気や相談がある人を見つけて、その人のそばにいる。タイミングを見はからい、相談のきっかけをつくる。
- A 気軽な相談が深刻な相談の予防になることを知っており、何げない会話の中で相談にのる。
- C 親から場の中で話し出した相談事に丁寧に対応する。
- D 場の中にいない。予約相談だけを相談として受ける。

29 相手の話を、肯定的関心を持って傾聴する

- S 話を整理して返すことができる。相手はよく聴いてもらえた、分かってもらえたという満足感を得ている。
- A 相手が伝えたい真意を、理解したいという思いで、素直に聴く。話を聴いていることが相手に伝わるような態度（体の向き、あいづち、おうむ返しなど）で示す。
- C 話の途中で口をはさむ、相手の話を自分の話にすりかえる。
- D 相手が話しかけてきても対応しない。

30 他人の気持ちを想像し、共感的な対応をする

- S 言葉にならない相手の感情を言葉にする。その人の本当の気持ちにぴったりの言葉をかける。特にポジティブなフィードバックが必要なときに、安心する言葉をかける。
- A 相手の気持ちに寄り添い、相手にそれを示す。
- C 相手への共感より先に、アドバイスや励ましをする。
- D 相手の気持ちが想像できない。

31 タイミングを見はからう

- S 信頼関係をつくり、適切な介入ができる。必要に応じて段階的に働きかける。相手の生活や情緒が安定するように取りはからってから、アドバイスをする。
- A タイミングをはかって介入する。
- C たとえば努力の限界を感じている人を励ますなど、介入してはいけないときに介入する。
- D 該当なし

32 相手が自分の力に気づく働きかけをする

- S 誰に対してもよい面を発見できる。相手が輝く場面をつくることができ、それが周囲に見えるような仕掛けをつくる。その結果として、相手が自分の力に気づく。
- A よい面を発見し、認めて伝えることができる。
- C 誰もが成長する可能性をもっていることを知っている。
- D 相手を認めることができない。

33 肯定的な言い方をする

- S 肯定的な言い方が習慣化している。相手の誤りを指摘しないで、むしろ現在やこれまでのがんばりを承認する。今、できていることを言葉にする。
- A 支援者の肯定的態度が相手の自尊感情を高め、自信を持たせることを知っている。肯定的な言い方をする。
- C 肯定的な言い方と否定的な言い方の違いを知っている。励ましや勇気づけをする。
- D 人をほめられない。否定的な言い方をする。欠点や誤りを指摘する。

34 わかりやすく伝える

- S 相手が現在知っていること、持っている情報に合わせた言葉と方法と内容を選択する。たとえば話や視覚的な工夫をする。情報量を絞る。
- A わかりやすく話す努力をしている。言葉と態度が一致している。
- C 言葉や話が難しく相手を緊張させる。
- D 話がさっぱりわからない。

35 相手の視野を広げる

- S 相手のとらわれや思いこみに対して新たな視点を提供して視野を広げ、希望を見せる。
- A 子どもは成長の途上にあることに気づかせ、今後の見通しを伝える。
- C 相手のとらわれや思いこみに気づくことができる。
- D 該当なし

36 課題を解決する方法を具体的に示す

- S 相手の現実に根ざした具体的問題解決の方法を相手と共に考えながら提示する。その結果、相手が自分の力で現実的に問題を解決できるようになる。
- A 相手の現実に根ざした具体的問題解決の方法を提示することはできるが、時に相手の状況や現在の力量にあっていない場合がある。
- C 問題を一般化して理想論や抽象論でとらえる。
- D 該当なし

37 相手の自己決定を尊重する

- S 自分が相手の問題をひきとるのではなく、あくまでも相手に考えさせる姿勢を持っている。自己決定のために情報が必要な場合には提供する。その結果、相手が自己決定できるようになる。
- A 相手が自分自身で決めたことの方が、他者に指示されたことよりも行動につながることを認識しており、自己決定をうながす。
- C 相手が求めているのに、相手の課題を解決しようとする。
- D 該当なし

38 親と子の関係を支援する

- S 相手に気づかれない自然さでモデルを示すことができる。関係性が築けていない親子につながりを実感させることができる。
- A モデルを示す必要がある人に気づき、モデルを示す。親に子どものすばらしさを気づかせる。子どもの気持ちを代弁する。
- C 支援の具体的方法がわからない。
- D 不適切なモデルを示す。これみよがしにモデルを見せ、相手に「自分はやらない」という感を抱かせる。

39 子どもへの教育的な支援をする

- S 乳児と個別に应答的なかわりができる。子どもの発達段階を見極めて、その子どもに必要な活動がわかる。主体的な遊びを見守ることができる。子ども自身の力量形成を支援の目的にする。
- A 子どもの年齢に応じたかわりを行なう。双方向のやりとりを大切に遊ぶ。子どもの应答性を高める働きかけを行なう。
- C 子どもに刺激を一方向的に与える。乳児に対して集団的に働きかける。子どもを楽しませ、お客様にする。
- D 子どもと遊べない。

40 子どもへの養護的な支援をする

- S 子どもの基本的欲求を充たすことの大切さを親に伝えて、利用者の生活習慣に変化をもたらす。子どもの心身の状態を総合的に見極めることができ、適切な対応ができる。
- A 基本的欲求が充足できていない子どもがわかる。
- C 子どもの心身の状態の変化に気づかないことがある。
- D 子どもの情緒的、行動的問題を母親のかかわりの問題、心理的な問題としてのみとらえる。

41 特別なニーズを持つ子どもを支援する

- S 障がいをもつ子どもを成長発達する存在ととらえる。家庭でできる療育の方法をいくつか提示する。障がいと診断されていないが、特別な配慮が必要な子どもがわかり支援する。
- A 障がいと療育の基本的知識をもっており、対応の工夫をする。
- C 障がいのある子どもを特殊な子どもとして扱う。過剰に保護・指導するか、放任する。
- D 障がいのある子どもや扱いの難しい子どもを排除する。

42 仲間づくりをうながす

- S 人に声かけすることをためらっている人や、人に声をかけられたいと思っている人を発見して、さりげなく場になじませる。自然に仲間づくりをうながす。
- A おしゃべりの価値をわかっており、あたたかいまなざしで見守ることができる。初めての利用者、転入してきた人など、特につながりが必要としている人に、声をかけきっかけをつくる。
- C 初めての利用者、転入してきた人などが、特につながりが必要としていることを知っている。
- D 人と人との関係を壊す動きをする。

43 チームワークを尊重する

- S 積極的に情報の共有をはかる。意見の違いを対立ととらえず、多様性を生かす解決方法を見いだすことができる。
- A チームワークが支援の質を高めることを知っている。建設的に意見を出す。他の人の仕事を認める。
- C 場全体の成果よりも自分の成果に関心がある。批判的に意見を出す。
- D チームワークを壊す行動をとる。会議に参加しない。

44 必要な資源につなげる

- S 利用者に合わせて、地域の資源や情報をそろえ提供する。情報の量と質を判断できる。専門的な支援が必要な場合には、資源の質を判断して慎重に紹介し、その後の経過を見守る。
- A 専門的な相談窓口、ピアサポートグループ、遊び場、育児サークルなど、育児を行なう上で必要な地域の情報を収集し、提供する。虐待など緊急時に必要な対応をとる。
- C 乳幼児を抱えている親は資源へのアクセスが困難であることを知っている。情報を選別することなく提供する。
- D 明らかに誤った情報を提供する。

45 ねばり強く支援し続ける

- S 人の可能性を強く信じている。多様な方法でねばり強く働きかける。混沌のなかにあっても解決を急がない。迷いや悩みに添い続ける。
- A 行動の定着には繰り返しが必要であることを知っている。一度や二度の働きかけであきらめない。
- C 人に短期的成長を求める。同じ方法で働きかける。
- D 該当なし

〈振り返る・学ぶ〉

46 活動の分析を行なう

- S 活動の後に客観的な活動分析を行っている。スーパーバイザーとなる人をつくっている。課題を発見したときには、他のスタッフと情報を共有する。

- A 支援の適切さを自ら振り返ることが習慣になっている。自分の支援が不適切であったときに気づく。

- C 自分の支援が適切かどうかわからない。

- D 自分の支援がすべて適切だと思っている。

47 実践のために学ぶ

- S 学びの場を自分でつくる。学んだ知識を状況や相手に合わせて柔軟に応用する。

- A 実践の中で学ぶ姿勢がある。自分の課題を意識して学ぶ。

- C 得た知識や理論にとらわれて、子どもや親にそのまま当てはめる。

- D 学ぶ姿勢がない。

6 実践を高めたい人のために

リストは簡潔に表現しているため、具体的な支援を理解するには十分ではありません。

研究の参考資料の中で、支援者が自らの力量向上のために特に役立つと思われる参考資料を以下に掲載します。

6-1 直接支援者の具体的実践

- 「子育て広場0123 吉祥寺」柏木恵子・森下久美子編著 ミネルヴァ書房 1997
- 「家族援助論」那須信樹編 保育出版社 2004
- 「子育てコミュニティスペース運営マニュアル増補版」ひだまりの会 2002
- 「ひだまり通信」「ひだまり通信2」ひだまりの会 2003
- 「心のバリアフリーをめざして」藤野むくどり公園開園5周年記念誌編集委員会 かりん舎 2001
- 「21世紀の親子支援」中野由美子・土谷みち子著 プレーン出版 1999
- 「健診とことばの相談1歳6か月児健診と3歳児健診を中心に」中川信子著 ぶどう社 1999
- 「心理臨床のかんどころ」村瀬嘉代子著 金剛出版 1998
- 「母と子のこころの相談室」田中千穂子著 医学書院 1993
- 「ダウン症乳児の親子心理療法」松島恭子著 ミネルヴァ書房 1997
- 「子どもの発達支援」山口勝弘・古屋義博編著 啓明出版 2002

6-2 支援・福祉に関する理論

- 「社会で子どもを育てる」武田信子著 平凡社新書 2002
- 「子育て支援と保育者の役割」柏女靈峰著 フレーベル館 2003
- 「ソーシャルワーク実践の基礎理論」北島英治・副田あけみ・高橋重宏・渡部律子編 有斐閣 2002
- 「ソーシャルワーク演習(上)」北島英治・副田あけみ・高橋重宏・渡部律子編 有斐閣 2002
- 「社会福祉援助技術論」深澤里子・晴見静子編著 光生館 2002
- 「コミュニティエンパワメントの技法」安梅勅江編著 医歯薬出版株式会社 2005
- 「エンパワメントのケア科学」安梅勅江著 医歯薬出版株式会社 2004
- 「実践コミュニティワーク」ビル・リー著 学文社 2005

6-3 実践評価に関する本

- 「保育環境評価スケール幼児版・乳児版」テルマ・ハームス、デビィ・クレア
リチャード・M・クリフォード著 法律文化社 2004
- 「ソーシャルワーク専門職性自己評価」南彩子・武田加代子著 相川書房 2004
- 「あなたの園の自己点検」全国保育協議会・保育施策委員会編 全国社会福祉協議会 2003

6-4 スーパーバイズを行う参考資料

- 「対人援助のスーパービジョン」植田寿之著 中央法規 2005
- 「リーダーシップを鍛えるトレーニングブック」渡邊俊一・三宅充祝著 かんき出版 2002
- 「ホスピタリティコーチング」清水均著 日経BP社 2004
- 「ホスピタリティリーダーシップ」吉原敬典著 白桃書房 2005

み・ん・な・で

様々な力を持った人たちが

～赤ちゃんもすばらしい力の持ち主です～

みんなで集まって、それぞれのあり方でそこにいる。

そんな居場所がすてきですね。

でも、ここであえて、わたしたちは、

わたしたち一人ひとりの日常の行動をことばにし、

自分自身に問いかけてみることにしました。

何らかのめやすがあると、人は自分を見つめ直すことができるから。

* * *

自分にできるいいところ、自分が特に心がけているいいところが見つかりましたか？

謙虚にそれを暖めて、大切にしましょう。

自分に足りないところがあったとき、

それを学びによって補うか、誰かの力を借りて補うか、工夫してみましよう。

自分がその場で一番すてきな支援者になることが目的ではありません。

自分たちの場がよりよくなることが大切ですよね。

不完全な私たち。みんなで、補い合いながら、温かい場を作りましよう。

自分に対する自分のチェックと周囲の人のチェックがずれていたら？

どうしてそうなったか考えてみましょう。

不安になることがありますよね。

ごまかさないで！ 今、あなたは成長のきっかけの最中にいます。

このリストは、じっくりじっくり考えるために作られました。

自分を知るのはとても大変なことです。

でも、きっと、きっと、その先にすばらしい出会いが待っています。

* * *

このリストを読んで思ったこと、感じたことを、

どうぞわたしたちに聞かせて下さい。

みんなで一緒に。それがわたしたちの願いです。

子育て支援者の コンピテンシーリスト

Ver. 2 直接支援者向け

発行 2006年3月31日

発行所 子育て支援者コンピテンシー研究会

- ・本研究は(財)こども未来財団委託による平成17年度児童関連サービス調査研究等事業「子育て支援活動における支援者の活動評価に関する調査研究」
汐見和恵・武田信子・高山静子・今井豊彦をもとにまとめたものです。
- ・本コンピテンシーリストの改変はご連絡ください。
- ・リストを活用される場合、およびリストに関するご質問は、下記までご連絡ください。

子育て支援者コンピテンシー研究会 事務局 今井豊彦

E-mail hikotoyo101@yahoo.co.jp

Fax 03-5680-4001

